

窓から広がる景色が、子どもたちの会話や想像を生み、遊びの世界をさらに豊かにしていると言います。デジタル技術と保育の可能性を探りつつ、遊びの中で、友達と関わり、子ども自身が感じる「心」を大切にしているそうです。

新しい技術と、人としての在り方を学ぶ

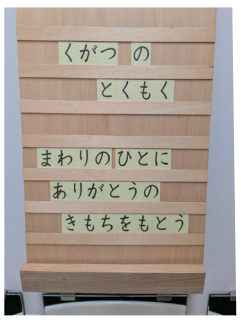
埼玉県さいたま市にある、与野ひなどり保育園様を訪問しました。当日は公開保育が行われており、他園の先生方と一緒に園内を見学させていただきました。与野ひなどり保育園様は、認可されて64年の歩みを重ね、仏教保育を基盤とし日々の保育を積み重ねてこられています。

見学の中で特に印象に残ったのは、園内に「9月の徳目」が掲げられている一方で、AIも活用されていたことです。例えば、ごっこゾーンには、月や季節に合わせて背景が変わる窓がありました。子どもたちの写真を合成し季節の風景を身近に感じながら、想像を膨らませて遊ぶ環境だそうです。デジタル技術と保育の可能性を探りつつ、園が大切にしてきた保育を守り、今の時代の技術も取り入れている姿勢が印象的でした。

また「ピーステーブル」には、自分の感情を指し示す感情表が置かれていたことも特徴的でした。ピーステーブルには、「子どもたちが自分の気持ちを言葉で伝え、相手の気持ちも知る場所。落ち着いて話をする場所です。」と説明書きがありました。

近くを通りかかった子に使い方を尋ねると、「今の気持ちを伝えられないときに、これを使うんだよ」と教えてくれました。先生に言われて使うものではなく、子どもたち自身が気持ちを伝えるためのツールとして活用していることが伝わってきました。

一緒に見学していた先生からは、「保育を見直しているところなので、学びが深かったです。職員と一緒に来たらよかったです」「どのクラスの子どもたちも、それぞれが遊びに集中していて、見学者のところへ来ないですね」といった声も聞かれました。自分の好きな遊びに夢中になっているその姿から、0・1歳児クラスからの心の育ちを大切にし、丁寧に関わられていることが伝わってきました。



子どもたちに大切にしてほしい心や行動「徳目（とくもく）」を毎月掲げているそうです



自分と相手の気持ちを、時計の針のように動かして使える仕組みになっていました。

園長の丸山豊生先生は、「発達や興味関心に合わせ、試行錯誤を常に行い、環境を変えています」と仰います。保育を変えていくことは、やり方を変えるだけではなく、園の環境や文化、先生方の意識や関係性を、子どもたちの姿を見ながら見直し続けていくことなのだと感じました。また、同じ場を見た先生方と感じたことを語り合えることは、他園の取り組みを知るだけでなく、自園の保育を見つめ直す機会にもつながるのだと感じました。

AIなどの新しい技術を取り入れながらも、子どもたちが自分や相手の気持ちに気づけるよう、人として大切な心が育まれていく環境設定が素敵だと感じました。私たちも新しい学びを重ねながら、保育に携わる者としての在り方を磨き続けていきたいと思います。

（奥山 卓矢）

ホームページ月次レポートの見方
「直帰率」について

毎月配信している「ホームページ月次レポート」には、訪問者数や最も閲覧されているページなど、ホームページの利用状況を知るためのさまざまな数字を掲載しています。今回は、その中でも「直帰率」について解説します。

直帰率とは、簡単にいうと「ホームページを訪れたものの、ほとんど見ることなくそのまま離れた人の割合」です。たとえば、トップページを訪れた100人のうち、50人がほかのページを見たり、ホームページ内で何らかの操作をしたりすることなく離れた場合、直帰率はおよそ50％となります。

では、直帰率はどのくらいが普通なのでしょうか。ホームページの内容や訪れる人の目的によって異なりますが、一般的には40～60％程度がひとつの目安とされています。ただし、この数字を超えたからといって、すぐにホームページに問題があると判断する必要はありません。

たとえば、園の住所や電話番号を調べるために訪れた場合、目的の情報が見つかれば、そのままホームページを閉じることがあります。また、トップページに園の特徴やお知らせ、入園案内などの情報が充実していれば、ほかのページを見ることなく必要な情報を得られる場合もあります。このような場合は、直帰率が高くても目的を果たせていると考えられます。

一方で、知りたい情報が見つからない、ほかのページへの移動方法が分かりにくいなどの理由で離れている可能性もあります。

そのため、直帰率は「何％なら良い・悪い」と数字だけで判断せず、「訪問者数」や「最も閲覧されているページ」などとあわせて確認することが大切です。また、毎月の直帰率を比較し、普段より大きく変化していないかを見ることもポイントです。

（川岸）

竹取新聞

発行所
株式会社 カグヤ

第208版

理念と実践で絆を結びます

竹取新聞は、「子ども第一義」の理念のもと、皆様の保育に少しでもお役に立てたらとの思いでお届けしている新聞です。お客様の素敵な保育実践はもちろん、マネジメントや働き方、子育てや暮らしのあり方、社内の取り組みやウェブ・IT支援まで、カグヤの実践を発信しています。明日から真似できることや、挑戦する勇気につながることを大切に発刊しています。

竹取新聞に関する皆様のご意見やご要望をお聞かせください！

ご意見箱

竹取新聞以外のご意見もお待ちしております。
お電話やメールでもOK！

03-3518-6217
info@caguya.co.jp

今月のカグヤ社内「一円対話」テーマ



席替えテーマ：「飛行機の座席を取る際の好みの席　前方→後方順」（同じ場合は通路側→窓側順）
（新しい個性や一面が知れるようなテーマ設定がポイント！）

自由テーマ：「最近、自分の中でこれやっぱり好きだなーって思ったもの」（趣味、場所、人、音など何でも）
（オープンで本心本音が出しやすいようなテーマ設定がポイント！）

一円対話は、園が主体となって「聴く文化」や風通しのよい組織風土を育てていく実践です。カグヤは、その取り組みが園に根づくよう伴走しています。ここでは毎月、カグヤで実践された一円対話のテーマをご紹介します。導入いただいている園の聴福人さんがテーマを設定する際の参考になれば幸いです。

一円対話にご興味のある方はお問い合わせください！

一円対話の情報はこちらから

稲作から学ぶ「育つ場」

11月23日は「勤労感謝の日」。「勤労をたっとび、生産を祝い、国民がたがいに感謝しあう」という趣旨で制定された祝日です。もともとは「新嘗祭（にいなめさい）」の日で、五穀の収穫に感謝し、お祝いする日だったといいます。私たちもおかげさまで、この秋、無事にお米を収穫することができ、当日は新嘗祭を行い、今年の新米をいただく予定です。

今年は、福岡の「和樂（わら）」の裏にある棚田とご縁をいただき、お米づくりをすることができました。苗づくりや水の管理、毎日の田んぼの見守り、ため池周りの草刈りなど、様々なことを経験する中で、お米ができるまでには、本当にたくさんの働きや繋がりがあることを実感しました。

また、私たちのお米づくりで大切にしているのは、「お米だけが育てばいい」ということではなく、できるだけたくさんの生き物が暮らせる、豊かな生態系をつくること。田んぼでは、これまで見たことのない水生生物をはじめ、多種多様な生き物に出会うことができました。そして、そんな環境の中で、お米も元気に逞しく育っていきます。田んぼいっぱいに広がる豊かな世界を眺めていると、どこか安心感を覚え、子どもたちにもこうした日本の原風景を繋いでいきたいと改めて感じます。

そう考えると、お米がイキイキ育つためには、お米だけを見るのではなく、それを取り巻く環境が豊かであることが大切なのかもしれません。それは、子どもの育ちにも通じるように感じます。子どもだけに焦点を合わせるのではなく、その周りにいる私たち大人や、動植物を含めたあらゆる命がイキイキ輝いていること。そんな場をつくり、調え、甦らせていくことが、それぞれの命が自ら育つ力を支えるのではないでしょうか。

「どうやって育てるか」ではなく、「どんな場なら育っていけるのか」。そんな「育てる」から「育つ場」へと視点を変えていくことが、「未来への種まき」ならぬ、「未来への土づくり」になっていくのかもしれません。

今年は新米をいただきながら、そんな命の繋がりや巡りに、改めて思いを馳せてみたいと思います。

（宮前 奈々子）



今年は古代米も含め色々な種類のお米が育ち、無事に収穫できました！

一期一会庵

聴く姿勢

人間は話を聴かないときに忙しくなるものです。この忙しいというのは、心を亡くすと書きます。よく心で感じろとか心で味わえと言われますが、これは実際には感覚を使うことを意味します。マインドフルネスが流行っているのは、頭でっかちに考えすぎたり猛スピードで処理してきた脳を休めるために、感覚を使って休ませようとするものです。

しかし実際に心は感覚なのかといえば、そうでもあるし、そうでもないようにも思います。

感覚を使うといっても、普段は目で見て耳で情報を聞いています。心の眼で観るといっても、眼を閉じるだけでは観えません。本質は何か、本当は何かと何回も確認するのも大変です。

ではどうするのがいいか、感覚や心の入り口はまず「聴く」ということだろうと私は思います。この時の「聴く」は「聞く」とは異なります。「聞く」は相手が何を言っているのかを知ろうとしますが、「聴く」とは、相手が何を感じ何を大切にしているかを知ろうとします。

この聴くというのは、脳は嫌がります。なぜなら脳で処理しているのは不安や心配、起きていない未来を先回りし、あれこれと聞こえてくるものをその場で情報処理をして危険回避をしていることがほとんどだからです。頭でっかちになると情報処理で脳がいっぱいになり、心配や不安が先回りして動けなくなります。これは脳が相手を自分の理解に当てはめようとするからそうなるのです。

そうではなく「自分に分からない何かがあるのではないか」或いは「きっと何か別の深い意味があるのではないか」と自分の理解を超えて聴いてみようとします。すると、理解を超えて余白や余裕をもってその存在そのものを受け容れ、安心して聴くことができるように思います。

この時の「聴く」が本当に知ることであり、分かるということなのかもしれません。

何でもすぐに理解しようとする癖が出ると、分かった気になって自分の思い込みの世界を広げただけだったりします。素直に謙虚に学び続けるというのは、まずありのままを聴く姿勢を持っているということかもしれません。子どもたちのためにもカグヤは「聴福人（ききふくじん）」の実践を積み重ねていきたいと思います。

（野見山 広明）

編集後記



コーヒーの水面越しに秋を見つけるのも^^

朝晩の冷え込みに、温かい飲み物がうれしい季節になりました。湯気の立つカップを手にすると、慌ただしく動いていた気持ちも、ほっと落ち着くように感じます。今月号には「聴く姿勢」の記事もありました。何かをしながらではなく、いったん手を止めて、目の前の人の話を聴く。そんな時間を、お茶を飲むひとときに重ねてみるのもよさそうです。年末に向けて忙しくなる前に、仲間や家族と「ちょっと一杯」。心も温まる時間を大切にしたいですね。（眞田 海）

caGUYa
株式会社 カグヤ
〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-1-17
東京堂神保町第3ビルディング8階
tel.03-3518-6217
fax.03-3518-6218

カグヤ公式 Instagram Follow us!